

定礎式雑感

国立病院機構千葉医療センター
院長 増田政久

私事になりますが、国立千葉医療センター（当時は国立千葉病院）にお世話になってから、早いもので丸9年が経とうとしています。今こうやって振り返ってみると病院の進路に大きな影響を及ぼすいろいろな出来事があった9年間でした。国立病院の独立法人化、医師新臨床研修制度の導入、臨床研究部の立ち上げ、DPCの導入、新病院建設計画の認可、そして竣工と、実に盛りだくさんの貴重な経験をさせていただき、病院が新しく change していくのを肌で実感することができました。

そんな中、昨年9月の旧病院の定礎開封式は非常に印象深い行事でした。ご存じのように定礎式とは古くは土台になる石（定礎石）を定め置く儀式でしたが、現在では建物に着工年月日などを彫り込んだ定礎板を埋め込み、その建築物の末長い堅固を神に祈る式典に変化してきたといわれています。旧病院

の定礎式は昭和40年7月に執り行われており、頑丈に封印された定礎板が取り外されると誰の目に触れることもなく奥にしまわれ、建物の解体以外に通常では見ることができない銅製の定礎箱があり、中には当時の院長であった鈴木五郎先生直筆の病院の沿革記や定礎の辞、発注者、施工者などが記された銅板をはじめ病院誌や硬貨が入っていました。瞬時にして何の抵抗もなく45年前にタイムスリップし、当時の空気に触れ、実になつかしく感動的でした。病院の実績は、綿々と続く continuous work の結果であることを再確認させられました。

病院はその外観が変わろうとも先人たちの思いも受け継いでいくということで、今、新病院の定礎板は旧病院のものを引き続き鎮定しようと思っています。

